

人を、想う力。街を、想う力。



beyond2020 プログラム
認証事業



2020年2月3日

報道関係各位

三菱地所株式会社
高松空港株式会社

障がいのある子どもたちの絵画コンクール 「第18回キラキラとアートコンクール優秀賞作品展」 高松空港にて初開催～2月11日（火・祝）よりスタート～

三菱地所株式会社は、高松空港株式会社協力のもと2月11日（火・祝）から2月17日（月）にかけて「高松空港2階国内線出発ロビー」にて「第18回キラキラとアートコンクール優秀賞作品展」を初開催します（後援：社会福祉法人高松市社会福祉協議会）。

「キラキラとアートコンクール」（後援：文部科学省・全国特別支援学校長会）は、障がいのある子どもたちの可能性を応援したいとの思いから、国内初の障がい者アートライブラリー アートビリティ^{※1}の協力を得て、2002年にスタート。歴代応募者の中からアートビリティの登録作家として現在26名が活躍するなど、子どもたちの才能を支援してまいりました。

※1 アートビリティ・・・1986年に社会福祉法人東京コロニーが設立した障がい者アートライブラリー。現在約200名の作家による約5,000点の作品がストックされ、印刷物等の媒体に貸し出されています。

本作品展は、18回目を迎える同コンクールの全応募作品1,388作品（39都道府県）の中から、審査会（1次審査・三菱地所グループ社員審査^{※2}・本審査）を経て選ばれた優秀賞50作品を札幌から福岡まで全国9会場で展示するもので、四国エリアからは作品4点が入選し展示されます。また、今回の高松会場は四国エリアでは初開催であり、全国の空港での開催も初めてです。本年2月21日（金）には、東京・丸ビルホールにて、表彰式を予定しております。

※2 一部、丸の内テナント企業社員を含む

各会場では、自由なテーマで子どもたちが思いのままに表現し描いた個性豊かな作品に対し、来場者からメッセージを受け付け、今後の励みにつながるよう、受賞者本人にお渡しします。

また、全応募作品は、コンクールホームページで公開するほか、応募作品はこれまで、様々な企業の冊子の表紙やカレンダーなどに使用されており、子どもたちの作品は、審査会、作品展、作品使用等を通じて、感動を与えています。

三菱地所では、本コンクールが子どもたちの優れた才能を評価・発掘・展示する機会となり、子どもたちが絵を描く楽しみや喜びを増し、芸術活動の裾野が広がることを願い、応援してまいります。

【第18回キラキラとアートコンクール優秀賞受賞作品より】広島県から8名が優秀賞受賞



(左から):「僕の大好きな海」ながいはるとさん(6 歳)、「なかよし親子」いしいはなさん(14 歳)、
「なかよしねこ」おおひらともやさん(13 歳)、「すきなもんぱっかりや♡」おくのゆなさん(11 歳)

優秀賞・全応募作品をホームページ (<https://kira-art.jp>) にて公開しています。

＜本件に関するお問合せ先＞

高松空港株式会社 企画管理部総務グループ TEL:087-814-3657(現地取材時窓口)
三菱地所株式会社 サステナビリティ推進部 TEL:03-3287-5780(全般)

1. 開催概要(高松会場)

- ①名 称: 第18回キラキラとアートコンクール優秀賞作品展
- ②日 程: 2020年2月11日(火・祝)～2月17日(月)10:00～18:00※
※最終日は17:00迄
- ③会 場: 高松空港 2階 国内線出発ロビー(高松市香南町岡1312番地7)
<https://www.takamatsu-airport.com/>
- ④入 場 料: 無料

各会場では、作者へのメッセージをお寄せいただき、メッセージを記入頂いた来場者には、本コンクール第17回優秀賞作品を使用して、社会福祉法人東京コロニー在宅就労グループ「es-team(エス・チーム)」*がデザインした「シール」をプレゼントします。
*es-team・・・「働くカタチは、ひとつじゃない」を合言葉に重い障がいのあるデザイナーやプログラマーなどが集う在宅就労(SOHO)グループ。

- ⑤応募作品: ・応募資格: 何らかの障がいのある応募年齢18歳までの方
・応募期間: 2019年7月1日(月)～9月4日(水)
・作品規定: 課題は自由。水彩、油絵、版画、パステル、鉛筆、貼り絵、切り絵、墨絵(習字は除く)など平面表現のもの。
サイズは規定(最大で509mm×660mm(小全紙)、最小でA4サイズ程度)。

2. 審査員講評 ※肩書きは2019年10月時点

■O JUN氏(画家・東京藝術大学教授)

今年のキラキラとアートコンクールの審査を終えて少し思うことを書いてみます。今年も全国から応募された作品の多さは例年の通りでしたが、県によって応募数の数にずいぶんと差があるなど思いました。その理由はいろいろと考えられますが、応募数の多寡よりも、それぞれの地に住み暮らし、そこで絵を描いたり、工作が好きであったり得意であったりする子どもたちや学生がいて、彼らは思い思いに創作に熱中している。さらに画材が十分に揃っていて、広い美術室、工作室があって、熱心に指導してくれる先生がいる、親が励ましてくれる、そういう素晴らしい環境であれば言うことはありません。今回もそういう恵まれた環境と人々の努力のなかで描かれた作品ばかりでした。これから各地を巡回する展覧会をご覧になればそれがよくわかります。でも、そういうところに現れない、見えないところでもひそひそこっそりと絵を描いている子どもや学生たちがいるものです。ここにも絵を描くことの「自由」があると思うのです。今年も素晴らしいたくさん作品を拝見してそんなことを思いました。私がそんなことを思うのは、やはりたくさん作品とご家族、先生方の深い愛情を目の当たりにしたからです。有難うございました。

■青柳 路子氏(東京藝術大学准教授、教育学研究者)

第18回目となる今年度のコンクールには1300点を超える作品の応募がありました。審査では、

その作品一点一点を見ていきました。微細でこだわりのある描写、勢いのある筆致、大胆な色使い、描こうとする対象をじっくり見つめる目あるいは優しいまなざし、工夫した画面構成など、その作品にしかないものを目にすることができました。

本コンクールでは描く対象・内容、用いる画材を限定していないため、実に多様な作品が寄せられます。そのため、作品には「自由」を感じます。子どもたちは「自由」に、色やかたちに載せて自分の思いや願いを表現しています。その表現は「趣味」や「嗜好」といった言葉でとらえるものではなく、子どもたちが生き、生活していくためになくてはならず、またその成長・発達を支えるものとして必要なものです。言葉によらないからこそ生まれる表現を、身近にある紙と鉛筆から専門的な画材までを用いて、子どもたちが「自由」に描き発表できる機会を先生方や保護者のみなさまとともに支えていきたいと思えます。

■西田 克也氏（西田克也デザインオフィス グラフィックデザイナー）

昨年のキラキラッとアートコンクールの審査の記憶もまだ鮮明に残っている中での、第18回の審査でした。その1次審査の会場に選ばれたのは、例年キラキラッとアートコンクールの最後のイベントとなる表彰式の会場に充てられる丸ビルホールで、ちょっと身が引き締まるような、感慨もひとしおの審査でした。いつものように1次審査は全応募作品の中から150作品余を選ぶわけで、選ぶ行為にも余裕のようなものがあって、兎にも角にも僕の錆び付いた感性に活を入れ、かがみ込んで手に取らせる（各審査委員には白手袋が支給…）引力を放つ作品を愉しみながら選んだつもりです。そして数日後の本審査。1次審査で選ばれた156作品から、今度はそのうちの106点は落とさなければならないという、当然選ぶ行為に余裕はなく、いくつもの自問自答に向かい合わねばなりませんでした。その一つが作者の年齢。大人のコンクールなら年齢は気にならないのに子どもの絵の場合となると…。個人的にはこれまで年齢は意識しないようにしてましたが、この数回は大きなファクターとして悩ましい存在に。例えば3歳の子どものナイーブと18歳の子どものナイーブ、とか…。と言うわけで、僕にとってキラキラッとアートコンクールは、毎回絵と対峙する自分捜しのコンクールなのかもしれません。

■高橋 宏和氏（社会福祉法人東京コロニー アートビリティ代表）

今年も審査を通じて多くの作品に出会うことができました。審査に応募者の新人・ベテランは影響ありませんが、初めての応募の方もいれば、過去に応募して下さった方、何年か連続して応募して下さっている常連さんもいて、例年に負けない作品が集まりました。今年の審査をして改めて気付きましたが、作品を拝見した何人かの応募者の方は、過去に応募いただいた方だと審査員が直感で分かることです。描きたいものを自分なりに表現することは非常に難しいことだと思います。しかし、本コンクールの応募作品は誰にも真似できないと感じさせる個性的な描写や、作風が確立しているかのような堂々とした作品もあり、審査員が会話を忘れて作品に見入ってしまう時間が長いために作風を覚えてしまい、過去の応募者に気付くことが多いのだと感じます。

個性的な作品が集う審査は非常に難しいですが、絵を完成させた時の達成感や充実感を忘れずに、今後も絵を描き続けて欲しいと思えます。審査員を更に悩ませる新たな作品のご応募を今後もお待ちしております。

■吉田 淳一（三菱地所株式会社 執行役社長）

今年で18回目を数える本コンクールに、全国から1388作品のご応募をいただきました。北海道から沖縄まで39の都道府県から応募いただき、最年少のお子さんは3歳で、新規に応募いただいた方の作品もたくさんありました。このように本コンクールを経験された方が増えていくことは、主催者としてとても嬉しく思っております。

本コンクールに応募いただくために、子供たちも作品制作を頑張っていると思いますが、ご家族のみなさま及び、各団体の先生方、並びにご尽力いただいている関係者の方々に心より感謝申し上げます。

これら、子供たちの素晴らしい作品をできるだけ多くの方に見ていただきたいと考えており、今年の本作品展は、四国において初開催となる香川県の会場が増えて、全9会場で行います。また会期終了後も、一部の絵については三菱地所グループ各社の受付や応接・会議室等に展示して、来訪される方々にも楽しんでいただけるようにしております。今後も応募者の皆様、審査員の方々をはじめ、作品をご覧いただく全ての皆様の変わらぬご支援を賜りますようお願い

申し上げます。

■高橋 明也 (三菱一号館美術館 館長)

毎年のように感じるのだが、なぜこのコンクールに参加する「彼ら、彼女ら」の作品が見る人の目と心にこれほど率直に語りかけてくるのか？

人間はみな等しく母親からひとりで生まれ、また最後にはひとりで旅立っていく。そしてその過程では誰もが膨大な数の人や組織との交流をしながら社会の一員として生活を組み立てていかなければならない。けれども、最初にこの世界と交流を始めた頃の新鮮な感情や思考はいつしか忘れられていく。

本来芸術には人々をそうした人間の原点に立ち戻らせる力と役割がある。そして絵を描く「彼ら、彼女ら」の中には、その最初の力を維持し、発展させていく能力が驚異的な形で人一倍保持されている。それがこのコンクールが与える新鮮さの秘密なのだ。

以上

《審査会の様子》

▼1次審査 (2019年9月30日)



▼三菱地所グループ社員審査
(2019年10月1日～2日/2会場)



▼本審査 (2019年10月4日/三菱地所本社にて)



認証事業公益社団法人企業メセナ協議会による芸術・文化振興による社会創造=メセナ認定制度「This is MECENAT2019」を取得